

# 一の沢北遺跡他発掘調査報告書

—笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書—

1988. 3.

山梨県教育委員会

関東農政局笛吹川農業水利事業所

# 一の沢北遺跡他発掘調査報告書

—笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書—

1988. 3.

## 序

本報告書は1987年度に実施した笛吹川農業水利事業国営幹線管水路埋設工事に伴う事前の発掘調査の結果をまとめたもので、調査対象の遺跡は山梨県東八代郡境川村小黒坂一の沢北遺跡、一宮町天神下遺跡、豊富村山口遺跡であります。天神下・山口両遺跡は遺跡確認調査だけで終了いたしました。

一の沢遺跡の所在する境川村は、甲府盆地の南縁にあって、曾根丘陵地帯の北東部に位置し、縄文時代・弥生時代・古墳時代の集落跡や古墳が多数発見され、遺跡の集中地域として知られています。このたび発掘調査された一の沢遺跡は、同じ工事による事前調査によって、1982・83年度に発掘調査を実施し、縄文時代中期～後期の住居址21軒、古墳5基が発見されております。また、この一部は『一の沢西遺跡』他として1985年度に報告書を刊行致しました。

この地域は、3度の発掘調査結果から見ても、極めて規模の大きな遺跡で、東西400m、南北500mの範囲に集落が分布し、しかも縄文時代前期から中期・後期の住居・土塙が密集していることから、縄文時代のこの時期の中心的集落遺跡であることが分かって参りました。このような大規模な遺跡は、遺跡の集中する曾根丘陵地帯でも稀であります。

本調査地域は、一の沢西遺跡の北側にあたり、幹線本管水路より分岐して北側に水を供給する、支線水管の埋設工事に伴う発掘調査のため、幅2.5mという限られた幅での調査でしたが、旧来から発見されている縄文中期の住居址の他に、前期の住居址2軒、平安時代住居址1軒が発掘され、古墳時代以降も連綿と遺跡が続いていることが分かりました。この結果は、従来の調査結果を補完するのに大いに役立つものと思われます。本報告書が、多くの方々に研究や学習の資料として、ご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜った関係機関各位、並びに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1988年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磐貝正義

## 例　　言

1. 本報告書は、昭和61年度に発掘調査した、一の沢北遺跡・天神下遺跡・山口遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、農林水産省関東農政局の委託と、文化庁の補助金を受けて、山梨県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査・出土品整理・報告書作成作業は山梨県埋蔵文化財センターが行った。
4. 山梨県埋蔵文化財センターでの調査担当職員は調査組織に記してあるが、整理作業は八巻与志夫が行い、報告書は末木 健が担当した。
5. 写真撮影は、調査現場を末木 健・八巻 与志夫が行い、遺物は末木 健が行った。
6. 本遺跡出土遺物及び調査図面・撮影フィルムなどは山梨県埋蔵文化財センターに保管している。ただし、2号住居出土遺物の一部は、境川村教育委員会で保管している。
7. 出土品整理は石川 操、松野和美、宮川 東、遠藤映子、柏木まつ江、深沢瑞江、和田宏美、五味芳子、弦間千鶴、内藤真知子、後藤良美、若尾澄子が行った。
8. 石材の鑑定は、山梨文化財研究所河西 学氏に依頼した。

## 凡　　例

1. 遺構図面は原則として60分の1にしてある。
2. 掲載した遺物図面は縄文土器実測図を6分の1、拓本は3分の1、石器は4分の1、土師質土器2分の1にしている。また、それぞれに縮尺を示すスケールを示している。
3. 石器の図面中、スクリーントーンが貼ってある部分は、磨かれている部分である。

## 目 次

一の沢北遺跡 .....	1
第Ⅰ章 地理的・歴史的環境 .....	1
地理的環境 .....	1
歴史的環境 .....	2
第Ⅱ章 発掘調査経過 .....	4
第1節 調査日程 .....	4
第2節 発掘調査組織 .....	4
第3節 調査方法 .....	4
第Ⅲ章 遺構・遺物 .....	5
第1節 遺構 .....	5
1. 繩文時代 .....	5
2. 平安時代 .....	13
3. 中世 .....	13
第2節 遺物 .....	17
第Ⅳ章 まとめ .....	26
天神下遺跡 .....	28
山口遺跡 .....	29

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図	1	第13図 1号・2号・4号住居址	
第2図 造構配置図	5	覆土出土土器	18
第3図 2号住居址平面図	6	第14図 4号・6号住居址・溝出土土器	19
第4図 2号住居址出土遺物(1)	7	第15図 土壌・減圧水槽地区出土遺物	20
第5図 2号住居址出土遺物(2)	8	第16図 減圧水槽地区・その他出土遺物	21
第6図 2号住居址出土遺物(3)	9	第17図 石器(1)	22
第7図 4・5号住居址平面図	11	第18図 石器(2)	23
第8図 4号住居址出土遺物	12	第19図 石器(3)	24
第9図 1号住居址平面図	13	第20図 6号住居址出土土師質土器	24
第10図 6号住居址平面図	14	第21図 土製円盤・土偶	25
第11図 減圧水槽地区造構配置図	15	第22図 天神下遺跡	28
土壤平面図	15	第23図 山口遺跡	29
第12図 減圧水槽地区溝平面図	16		

## 図版目次

図版1 一の沢北遺跡発掘調査状況	図版8 2号住居址出土遺物(1)
図版2 1号住居址・2号住居址	図版9 2号住居址出土遺物(2)
図版3 4号住居址	図版10 4号住居址出土遺物
図版4 4号住居址遺物出土状態	図版11 各遺構グリッド出土土器
図版5 5・6号住居址・減圧水槽地区	図版12 各遺構出土土器・土製円盤・土偶
図版6 土 壤	図版13 天神下遺跡調査状況
図版7 土 壤・溝	図版14 山口遺跡調査状況

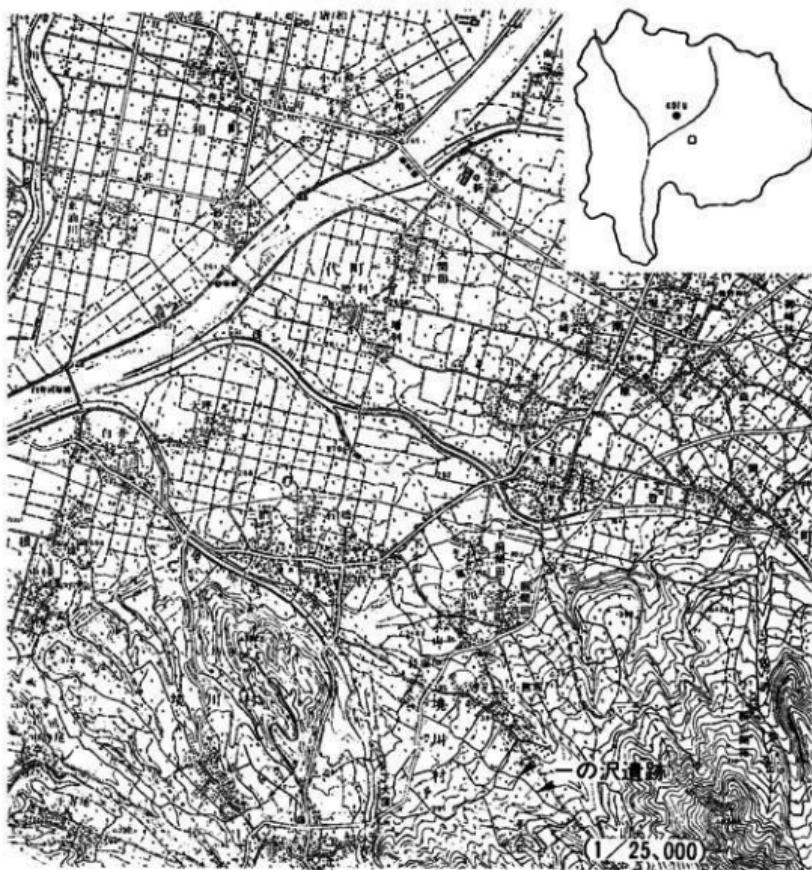
# 一の沢北遺跡

## 第I章 地理的・歴史的環境

### 1. 地理的環境

#### 遺跡位置

遺跡は山梨県東八代郡境川村小黒坂字一の沢地先他に位置する。遺跡は御坂山系の前山である名所山と春日山の間を流れ出る狐川の形成した扇状地の扇頂近くに位置し、北西に面した緩斜面、標高 410 ~ 430 m 近りに広がっており、その規模は東西 400 m、南北 500 m にも及ぶ。



第1図 遺跡位置図

## 2. 歴史的環境

境川村は甲府盆地の南東縁にあって、曾根丘陵という標高320～400mのなだらかなベンチ丘陵が続く地域の北東部に位置する。曾根丘陵は古来より遺跡の宝庫として知られ、隣町の中道町では先土器時代からの遺跡が発見されているし、本村からも先土器時代の石器が採集されたり、縄文時代・弥生時代・古墳時代の集落跡や古墳がたくさん発見されている。

過去に発掘調査された遺跡とその概要は次のとおりである。

No	遺跡名	所在地	発見された遺構	調査者	調査年	報告書
1	八乙女遺跡	藤岱字八乙女		法政大学	昭43	
2	室屋遺跡	藤岱字室屋	縄文・古墳時代前・後期	県教委	昭47	辻・蘇在家
3	神の前遺跡	小山	古墳時代前期集落	県教委	昭48	京原遺跡
4	八乙女塚古墳	藤岱字八乙女	古墳2基	県教委	昭55	馬乗山古墳
5	口明塚古墳	三門	弥生周溝墓1	県教委	昭55	口明塚古墳
6	石橋条里遺跡	石橋	古墳時代～平安時代	県教委	昭56	石橋条里
7	柳原遺跡	小黒坂	縄文草創期	村教委	昭56	柳原
8	真福寺遺跡	大黒坂	縄文	県教委	昭57	真福寺遺跡
9	一の沢遺跡	小黒坂	縄文10・古墳4	県教委	昭57	
10	間門遺跡	寺尾字間門	縄文散布	村教委	昭58	
11	一の沢西遺跡	小黒坂	縄文11	県教委	昭58	一の沢西
12	手古松遺跡	手古松	古墳時代住居1	県教委	昭58	手古松
13	藤岱遺跡	藤岱字切附	散布地	県教委	昭58	藤岱遺跡
14	智光寺・切附	藤岱	古墳・散布地	県教委	昭59	切附智光寺
15	物見塚遺跡	寺尾	縄文・弥生・平安	村教委	昭59	物見塚
16	小黒坂南遺跡	小黒坂	縄文・平安	村教委	昭59	小黒坂南
17	一の沢北遺跡	小黒坂	縄文・平安	県教委	昭61	
18	一の沢北遺跡	小黒坂	縄文	村教委	昭61	
19	金山遺跡	小黒坂	縄文・古墳時代前期	村教委	昭61	
20	牛居沢遺跡他	藤岱・三門	古墳時代～奈良時代	県教委	昭62	

縄文時代で注目されている遺跡には、境川カントリークラブ造成工事に伴って発掘調査した小黒坂南遺跡群の寺平遺跡、笛吹川水利事業に伴って発掘された一の沢遺跡、道路調査で発見された金山遺跡などがある。寺平遺跡からは縄文前期終末の十三菩提式期の集落が発見されているし、一の沢遺跡・金山遺跡からは縄文中期中葉の集落や中期終末の敷石住居が発見された。このほか小学校の校庭になっている柳原遺跡では、縄文草創期の尖頭器が出土しており、この地域の歴史の古さを物語っている。

弥生時代の遺跡も原・寺尾・小山などの台地上や、石橋・三門の扇状地部分から出土しており、その出土量は多いが、残念ながら農耕中の発見のために、正確な記録のないものも多い。古墳時代の遺跡は大規模農道に伴う発掘調査で発見された、京原遺跡や蘇在家遺跡から五領

式期や鬼高式期の集落が発見され、手古松遺跡からも鬼高式期の住居が発見されている。集落だけでなく、古墳も数多く存在したと伝えられるが、その多くは既に開墾や開発にあって消滅している。本村で最も古い古墳は八乙女古墳（馬乗山古墳）で、1号墳は直径15mの円墳で、2号墳は全長50mの前方後円墳である。1号墳の主体部は4基の石棺を中心部に置かれ、このうちの1基からかつて鉄剣・直刀・鐵鎌などが出土した。一の沢遺跡周辺には小黒坂古墳群があり、小山の小山古墳群、藤塙地内の古墳群など50～60基の古墳群があったと言われる。このうちの大部分は古墳時代後期の横穴式石室を有する円墳で、小山中村3号墳や蛇山・大窪口明塚などから、土師器・須恵器・鉄器をはじめ、耳飾りや勾玉などが出土している。なお、最近牛居沢遺跡から古墳時代後半の須恵器を焼いた窯跡が3基発見されており、窯業史上注目されている。

奈良時代については遺物が少ないので様子がわからないが、藤塙や大窪から布目瓦が出土しているので、奈良～平安時代の寺院があったと想定され、古代史を紐解く上で、見逃すことのできない地域の一つとなっている。なお、本村の平地部は条里制の遺構が残っていると伝えられているが、発掘調査によって、水田の跡が明らかにされた例はない。

## 第II章 発掘調査経過

### 第1節 調査日程

1986 9 29 発掘調査通知提出  
9 29 減圧水槽部分の表土除去  
10 2 発掘調査開始  
10 9 水管埋設部分の道路面を重機によって路面除去  
平安時代の住居発見  
10 23 1号住居竈・周溝の調査  
10 25 2・3号住居発掘開始  
10 28 2号住居完了  
11 1 4・6号住居調査  
11 10 調査終了  
11 11 片付け  
12 2 遺物発見通知

### 第2節 発掘調査組織

発掘調査主体 山梨県教育委員会教育長 渡辺 弘

発掘調査機関 山梨県埋蔵文化財センター所長 磯貝正義

発掘調査担当者 山梨県埋蔵文化財センター文化財主事 末木 健

文化財主事 八巻与志夫

作業員 初鹿久子 橋田香美江 宮川真由美 石原益子 渡辺鈴子 飯田美代子 竜沢房子  
長田すみ子 斎藤つね子 橋田満子 小林敬子 沼田由起子 渡辺かほる 武川ま  
す美

調査協力者 境川村教育委員会 境川村小黒坂地区 瞬長田組 古谷健一郎

### 第3節 調査方法

調査対象地区は 538 m<sup>2</sup>あるが、このうち村道部分に埋設される水管は幅 2.5 m、長さ 127 m で、減圧水槽部分は 10 m × 17 m の範囲があり、二つの地区に分けて調査した。調査グリッドは 3 m 方眼とし、村道部分の調査グリッドと整合させた。

道路部分の路面アスファルト、路床材はカッターによって切断後、重機とダンプで搬出し、黒色土を重機で削平した後に、ジョウレンで遺構確認をおこなった。遺構内は遺物を残して遺物分布図を作成するとともに、土層観察、写真撮影をおこなった。また、遺構だけの平面図及びエレベーション・レベリングを行っている。減圧水槽部分は耕作土の除去後、遺構確認を行い遺構内を調査した。

## 第III章 遺構・遺物

発見された遺構は、縄文時代住居3軒、土壙、平安時代住居1軒、中世溝2本、柵列1本がある。以下、時代別に遺構・遺物の説明をする。

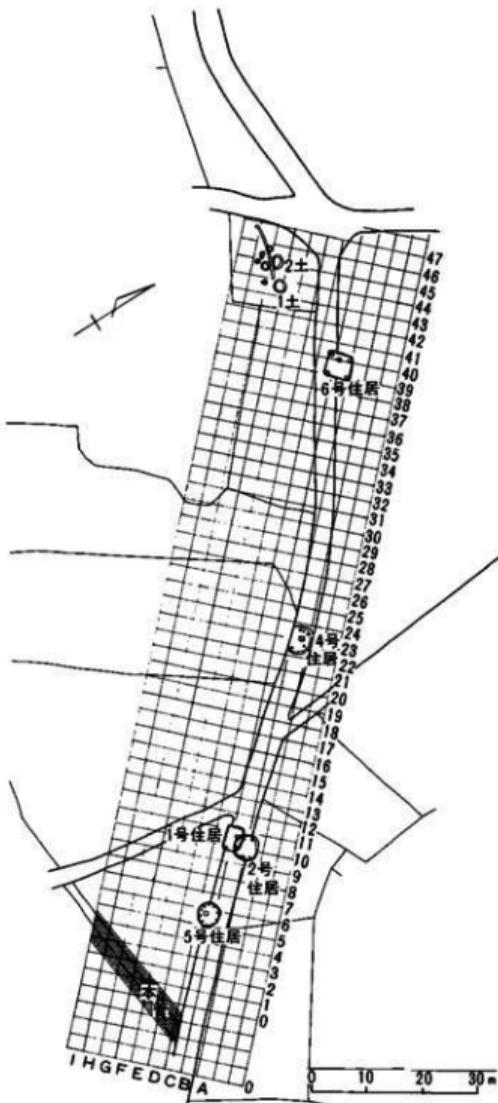
### 第1節 遺構

#### 1. 縄文時代

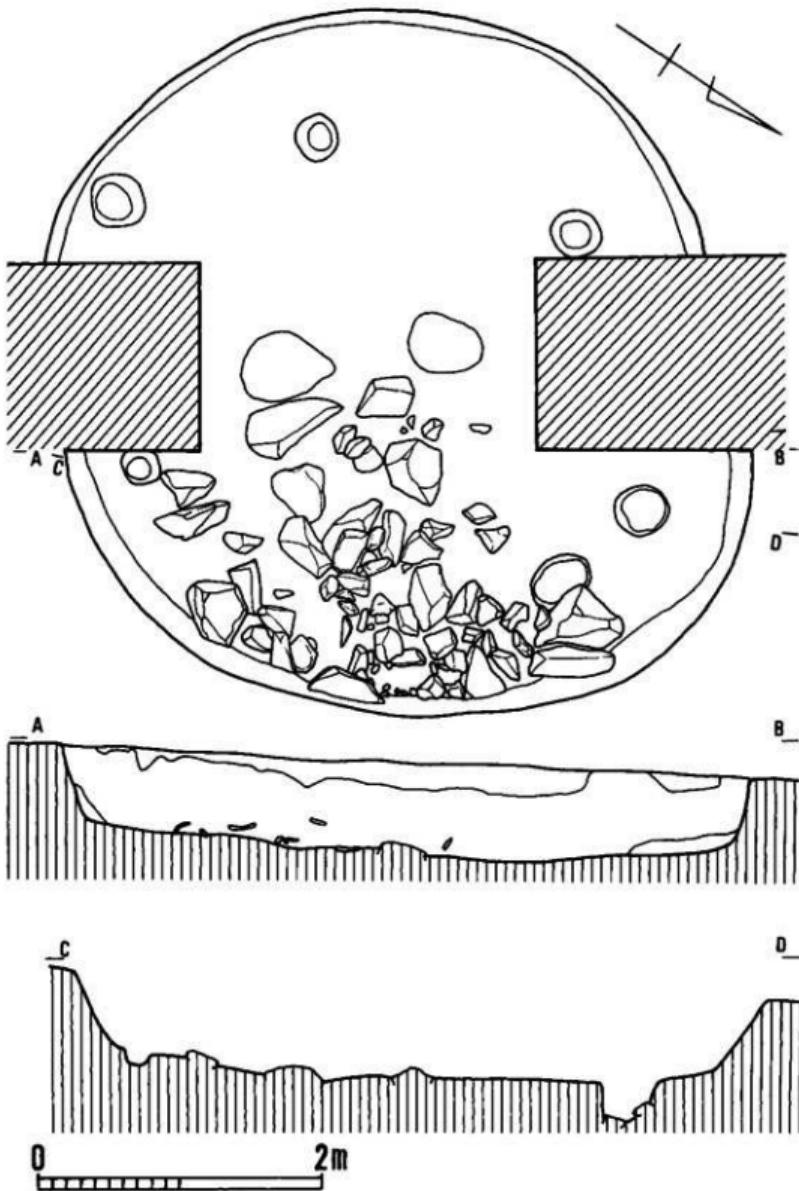
##### 2号住居（第3図）

平安時代の1号住居と北東側が重複しているが、本住居の方が深く掘り込まれているので、遺構は残っている。また、住居中央を村道のコンクリート壁が横断しているので、覆土の一部が削除されてはいるものの、遺構の全体は遺存している。水管部分調査区の南側に位置する。なお、村道の外側は境川村教育委員会が村道拡幅に伴って発掘調査を実施したので、その成果を利用している。

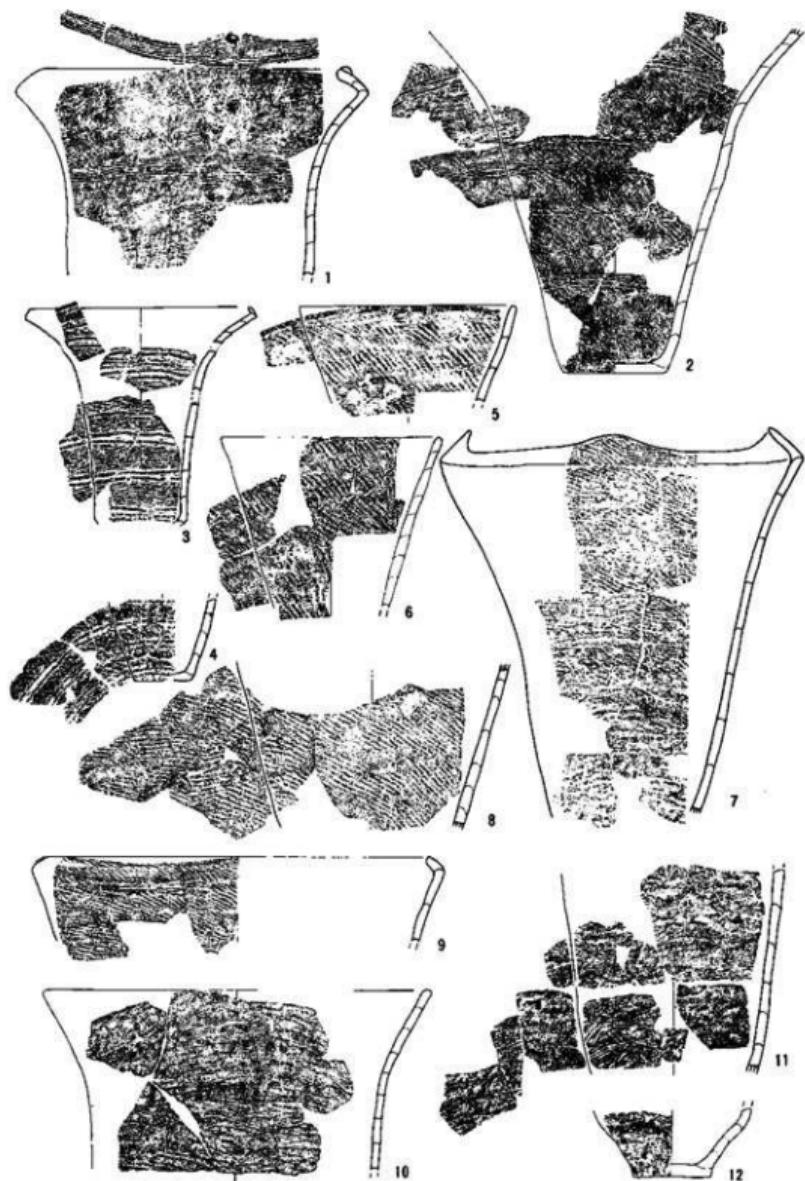
住居址は南北5.2m、東西4.9mのほぼ円形を呈しており、住居の掘り込みは確認面からは平均60cmの竪穴住居である。住居中央が若干窪んでいるが、その中央部に2カ所の焼土が並び、これが住居に伴う地床炉と思われる。どちらも直径40cm～60cm位の楕円形に焼けており、掘り込みはない。柱穴は住居の壁に沿って、6本が検出されている。



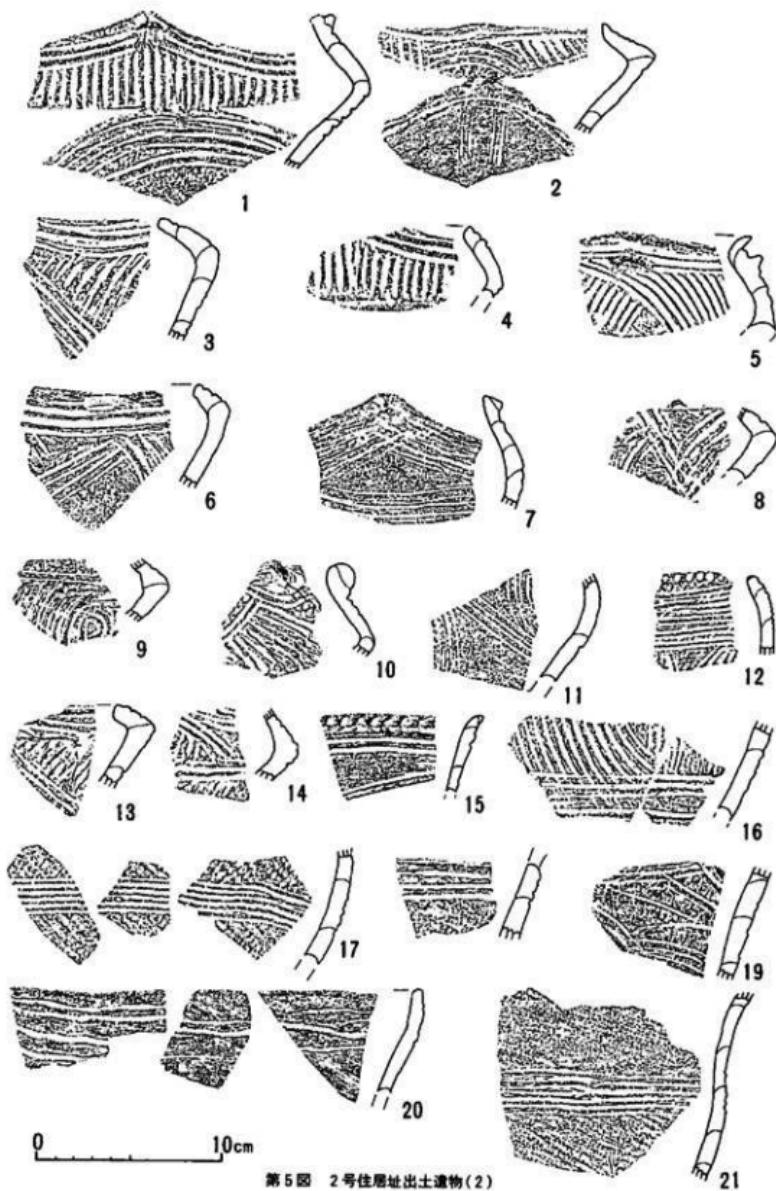
第2図 遺構配置図



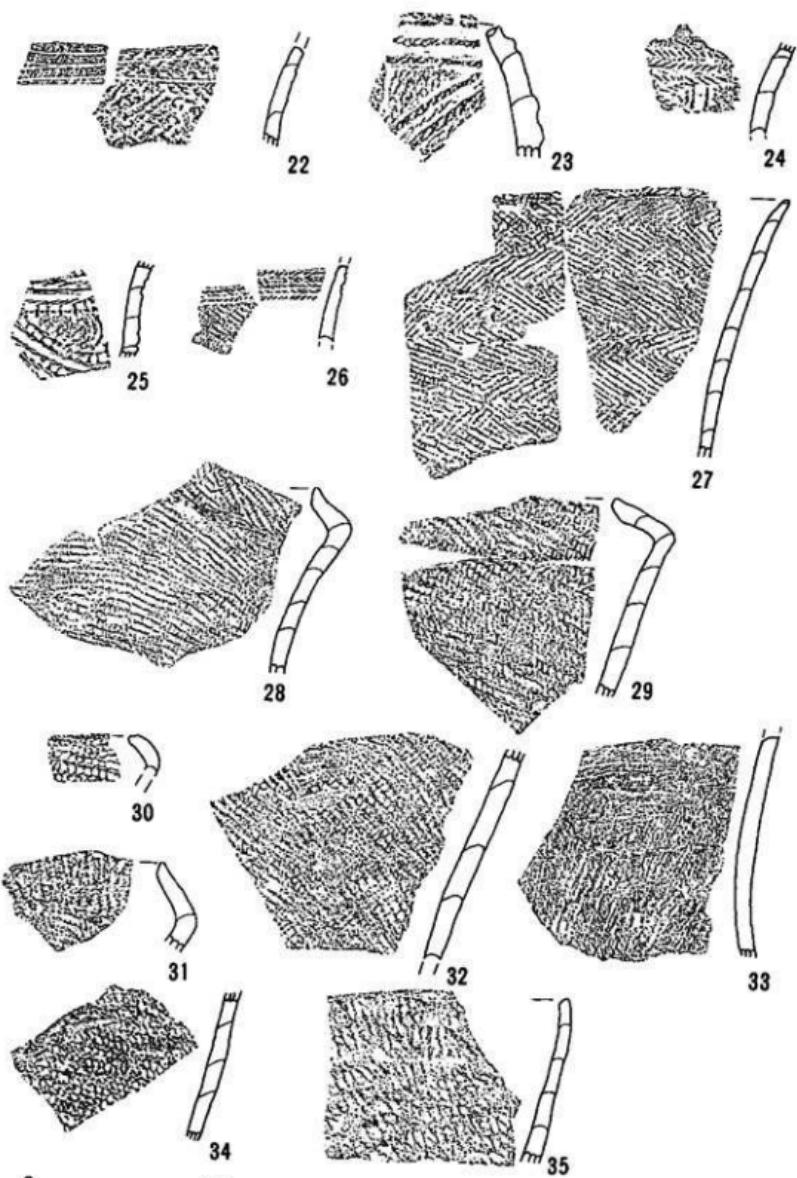
第3図 2号住居址平面図



第4図 2号住居址出土遺物(1)



第5図 2号住居址出土遺物(2)



第6図 2号住居址出土遺物(3)

Pit1は直径40cm、深さ24cm、Pit2は直径30cm、深さ21cm、Pit3は直径35cm、深さ23cm、Pit4は直径40cm、深さ30cm、Pit5は直径35cm、深さ26cm、Pit6は直径30cm、深さ17cmである。

遺物は住居内覆土中から出土しており、所属する時期は縄文前期後半、諸磯b式である。第4図1、2及び5・6図1～22は縄文地文に半截竹管で文様を施しているもので、口縁は波状口縁で、口唇はくの字に屈曲するものが多い。第4図は3、4及び第6図23、24、25、26は縄文地文に粘土の細い紐を張り付け、その上にヘラで刻みを付けるものと、縄文を転がすものがある。縄文地文でも、横方向の結節縄文がある第4図5、6と、羽状縄文が横方向に施される第6図27があり、そのほかは粗い単節斜縄文地文である。第4図10～12は無文の深鉢である。石器はスクレイバー1点で、そのほか取り上げるべきものはない。

### 3号住居（欠番）

黒色土中に遺物の集中が見られたので、住居ナンバーを付けたが、遺構が確認できなかったので、欠番とした。

### 4号住居（第7図）

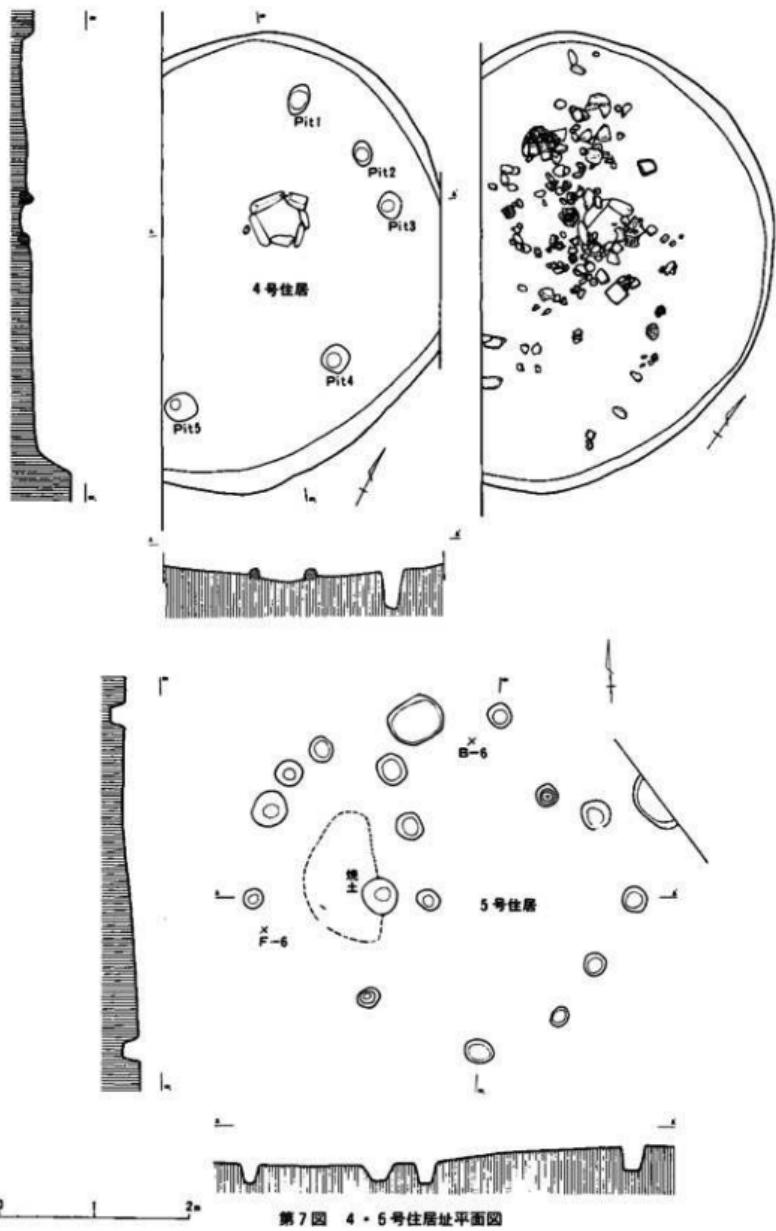
水管部分の中央から発見された住居で、住居のほぼ中央部が検出できた。直径4.9mの円形か楕円形を呈しており、確認面から床までの深さは約40cmである。炉は住居の北側に偏っており、五角形の石囲い炉である。炉は55cm～60cmの規模で、細長い円錐6個を組み合わせている。柱穴は5本検出されており、Pit1は直径20～30cmの楕円形で、深さ54cm、Pit2は直径20～30cmで、深さ32cm、Pit3は直径25cm、深さ42cm、Pit4は直径30cm、深さ35cm、Pit5は直径35cmで、深さ37cmである。床面の状態は良好ではなく、炉の周辺がやや堅いものの、壁に近付くに従って軟弱となる。

住居覆土中からは縄文中期中葉の一括土器をはじめ、礫、石器（打製石斧・磨製石斧）、土製円盤などが出土している。第8図は井戸尻Ⅲ式土器であるが、3個体図化できた。いずれも胴部がくびれた器形であり、口縁部には装飾把手が付けられるものが多い。遺物の出土状態は床面から浮いた状態で、遺物は炉の周辺に集中している。住居廃絶後に土器や礫が一括廃棄されたものと思われる。

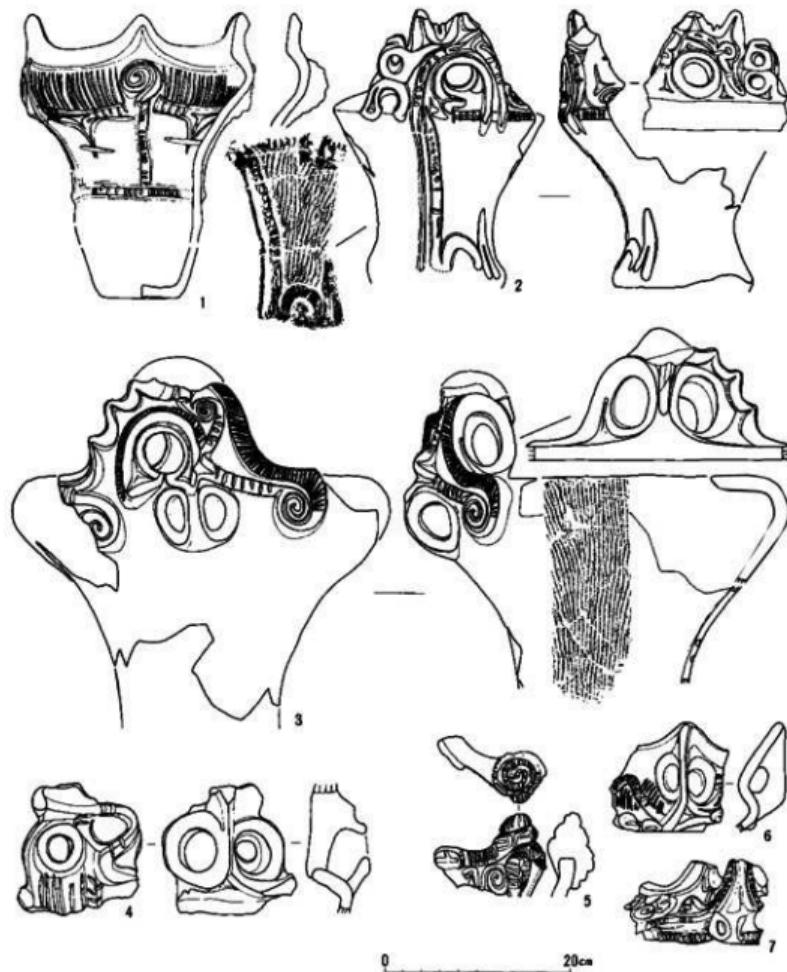
### 5号住居（第7・8図）

水管地区の南側から発見された遺構で、住居の立ち上がりは既に削平されて残存しない。柱穴群は直径3.5～4mの円形に配列されている。この中央に、焼土が広がっており、住居であることを確信させる。柱穴は13本ほど発見されているが、いずれも20～30cm位の深さで、主柱穴を特定することはできない。焼土は住居中央西側に偏しており、南北1.5m、幅80cmである。地床炉であろう。

出土遺物は覆土中から縄文前期後半の諸磯b式土器が若干検出されているが、量は多くない。



第7図 4・5号住居平面図



第8図 4号住居址出土遺物

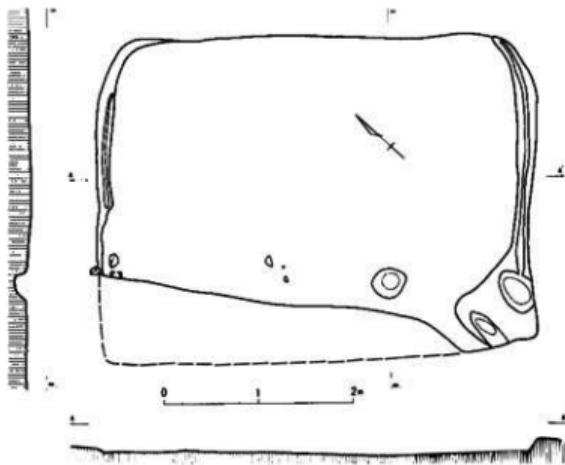
## 2. 平安時代

### 1号住居（第9図）

2号住居址の上に重複して造られている住居で、長方形のプランをもち、竈が南隅コーナーに造られている。住居の一部は村道の擁壁に切られているので、正確な規模は分からないが、竈の位置、周溝のカーブなどから推定することができる。長軸4.6m、短軸3.5mの長方形で、周溝は竈の東側と住居北側にあり、平均の幅は10cm、

深さ5cmである。南壁の高さは10cm、北壁は殆ど平坦で、周溝によって住居範囲が示された。柱穴は竈の前に1本あり、直径40cm、深さ15cmである。竈周辺及び、住居中央の床面は良好である。

住居内の遺物は殆ど無いが、竈の位置、住居の構造から、住居の年代を平安時代後期とした。



第9図 1号住居址平面図

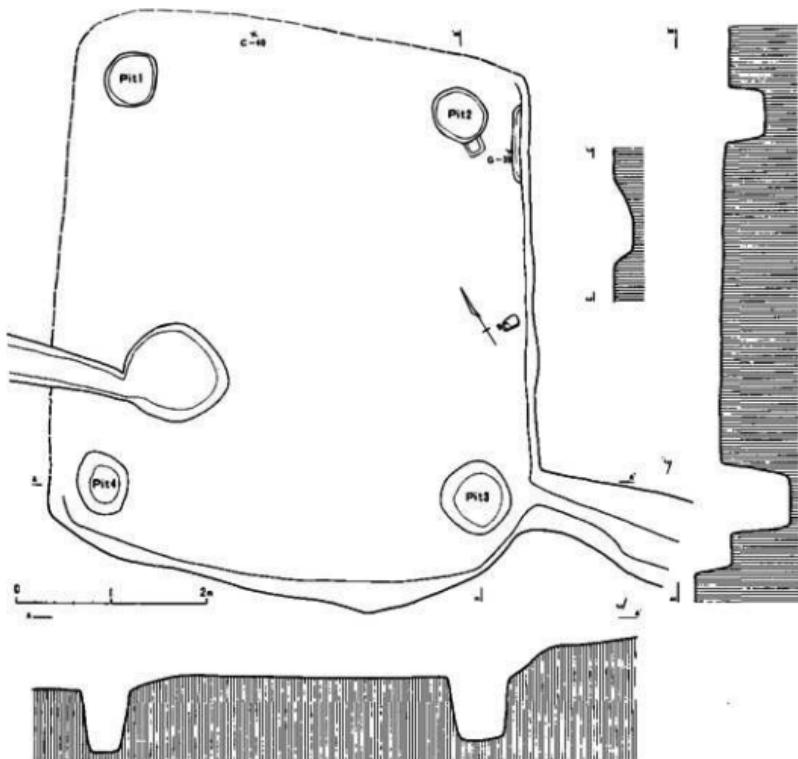
## 3. 中世

### 6号住居（第10・28図）

水路地域では最北の遺構で、住居が調査区のはば中央で発見された。一部南北方向の溝に切られているため、プラン確認に時間を要したが、中世の方形建物址である事が、出土遺物の土師質土器によって確認された。

住居の規模は東西5.2m、南北5.9mで、住居の掘り込みは南側で40cm、北側は0cmである。北側は削平されて壁がなくなってしまったものである。住居のコーナーには柱穴があり、Pit 1は直径55cm、深さ35cm、Pit 2は直径60cm、深さ41cm、Pit 3は直径75cm、深さ62cm、Pit 4は直径60cm、深さ62cmである。なお、西側コーナー近くに皿状のピットがあり、直径1m、深さ16cmである。このピットから北西側に溝が伸びている。この溝は住居南側に接している溝の続きであり、この住居より新しいものと推定される。

出土遺物には土師質土器壺1点がある。直径12.5cm、高さ5.5cm、底部直径7cmである。底部は糸切り底で回転糸切りり放しである。胎土は赤褐色で軟らかく、内外の器面にはロクロ横撫の痕が明瞭に残っている。



第10図 6号住居址平面図

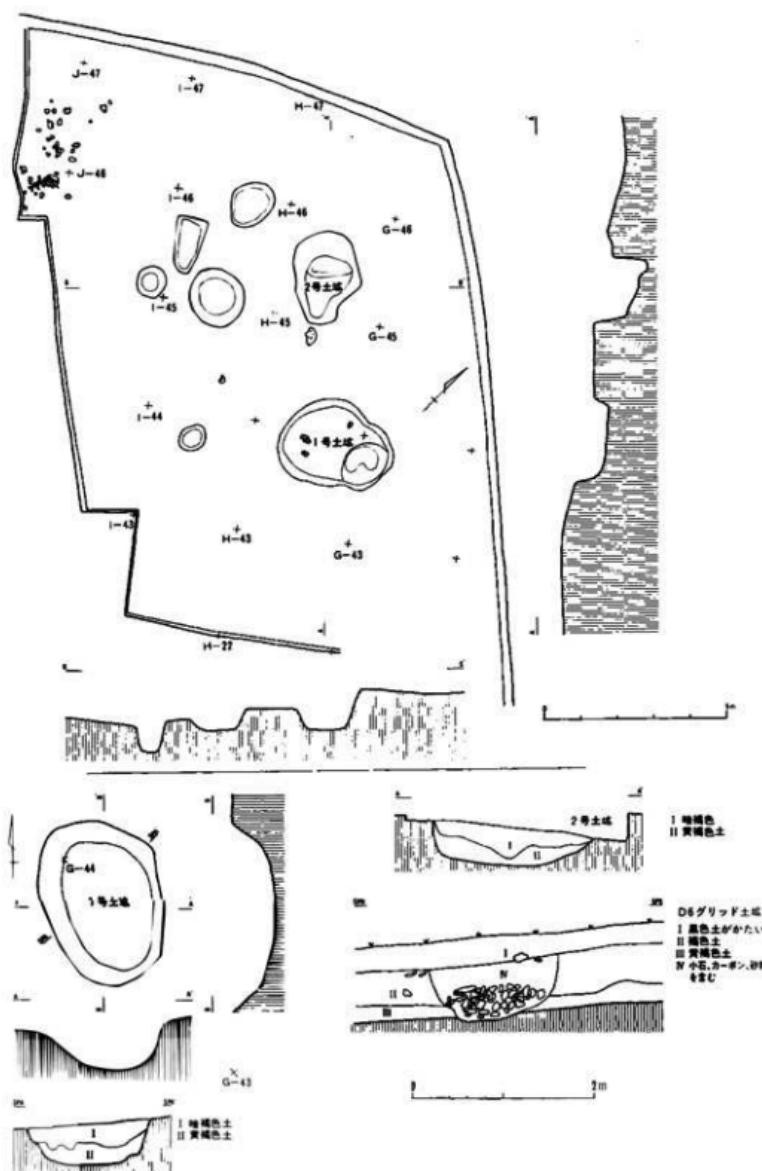
#### 4. 減圧水槽地区（第11図）

本地区は $15\text{m} \times 12\text{m}$ の範囲であるが、住居などは検出されず、土壌群と溝が1本あった。土壌は小さなものや、地面の染み状のものも含めれば、7基となるが、土壌と認められるものは2基である。

1号土壌は長軸 $1.8\text{m}$ 、短軸 $1.3\text{m}$ の長円形を呈しており、深さは $60\text{cm}$ の船底形である。内部からは磨石が1個出土した。2号土壌は不整形のラッキョウ形をしている。長軸 $2.5\text{m}$ 、短軸 $1.9\text{m}$ で、深さは $40\text{cm}$ である。内部からの出土遺物は中期土器片が僅かに出土している。

溝は褐色土中で検出されたもので、溝の覆土は黒色土である。出土遺物には縄文土器があるが、土層からは縄文時代の遺構とは考えられず、中世以後の遺構と思われる。具体的な時期判定ができる遺物はない。溝は東西方向に掘られ、幅 $30\sim 50\text{cm}$ 、長さ $9.5\text{m}$ で溝の断面はU字形を呈する。

なお、地区西側の隅（K 45・46・47、J 45・46・47 Grid）から疊と土器片がまとまって出



第11図 滅庄水槽地区遺構配置図・土壤平面図

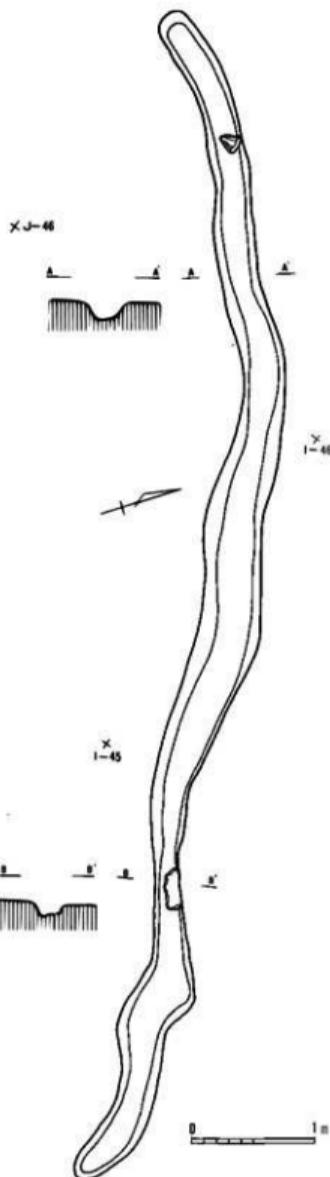
土する部分がある。前期後半～中期中葉の土器が混じっており、浅い埋没谷の底に近い部分である。捨て場であろうか。

##### 5. その他の遺構（第11図）

D 6 グリッドの掘削断面に土壤断面が観察された。5号住居の東側である。躰が船底状に詰められている遺構で、平面プランは確認できないが、おそらく円形を呈していると思われる。内部から時期の決められる遺物は出土していない。

6号住居址を南北に貫いている溝がある。この溝は浅いU字形断面の溝で、長さは約16m、幅80cmで、南側は細く、北側が太い。時期は不明であるが、6号住居址を切って作られて要ることから、中世以後という事になろう。

このほかA-26グリッドあたりを東西に走る溝がある。



第12図 減圧水槽地区溝平面図

## 第2節 遺物

### 1. 土器（第4～6・8図、第13～20図）

本遺跡から出土した土器のうち、その主体は縄文時代の土器群である。2号住居の縄文前期一括遺物（第4～6図）と4号住居の中期中葉の一括遺物（第8図）が中心である。そのほかは遺跡の覆土及び、グリッド調査段階で出土したものである。前期後半から中期後半の土器破片が出土している。なお、1号住居の内部から土器片は出土していないが、住居構造から平安時代に比定される。6号住居は出土土師質土器から中世としている。

では、各時期の遺物についてその概要を記述する。

#### (1) 縄文時代

##### 前期

2号住居から出土した遺物を主体とする。

##### 深鉢型土器

a類 縄文地文に半截竹管で横方向に条線が引かれるものである。口縁部の条線は平行沈線を主とするが、格子状に平行条線を交差するもの、及び弧線・同心円の組み合わせのものもある。口縁部がくの字に屈曲する形態があるが、外反のみのものもある。なお、波状口縁部をもつものも多い。

b類 口縁部と平行に細い粘土紐を数段めぐらし、粘土紐の上にはヘラで刻みを付けたり、縄文を転がしたりするものがある。口縁部がくの字に内側に屈曲するものもある。

c類 結節縄文が横方向に回転施文されるもので、口縁部はラッパ型に開くものが多い。

d類 縄文地文のみが器面に施される。口縁部は波状口縁となるものが多いようである。

e類 羽状縄文が横方向に施文されるもの。

f類 無文であるが、器面には強くヘラ整形の跡が残っている。

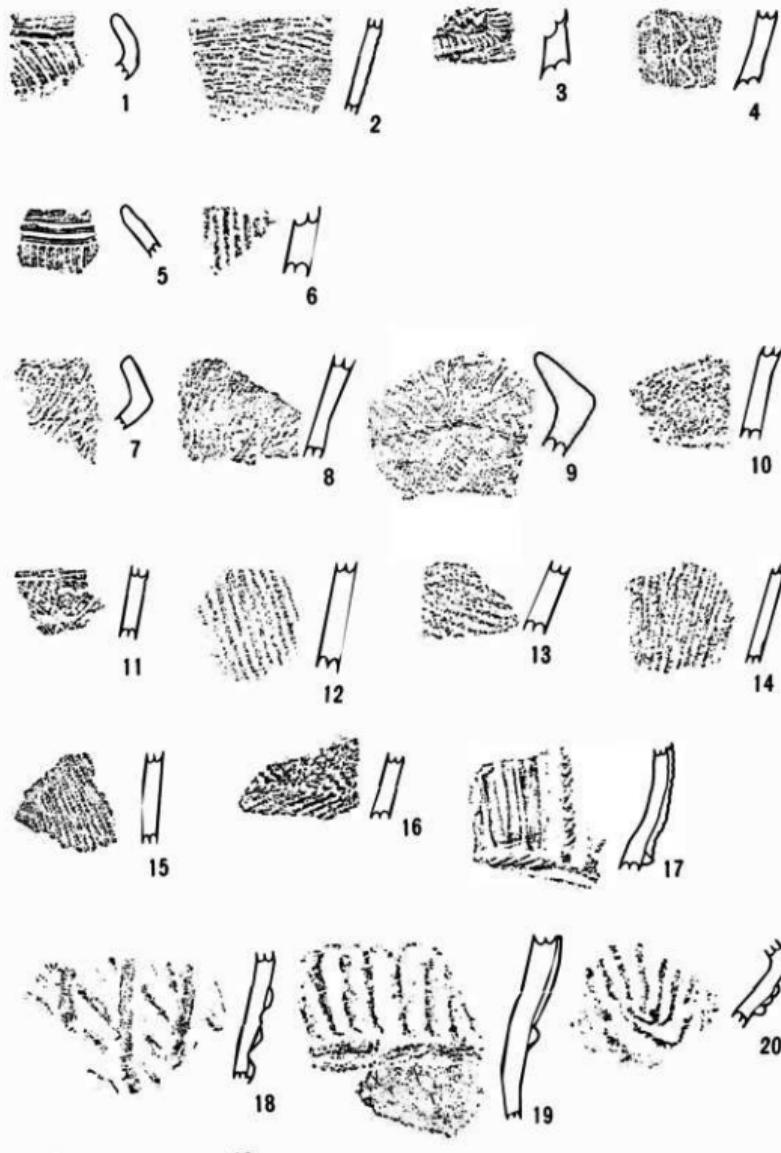
##### 中期

4号住居出土遺物が中心である。

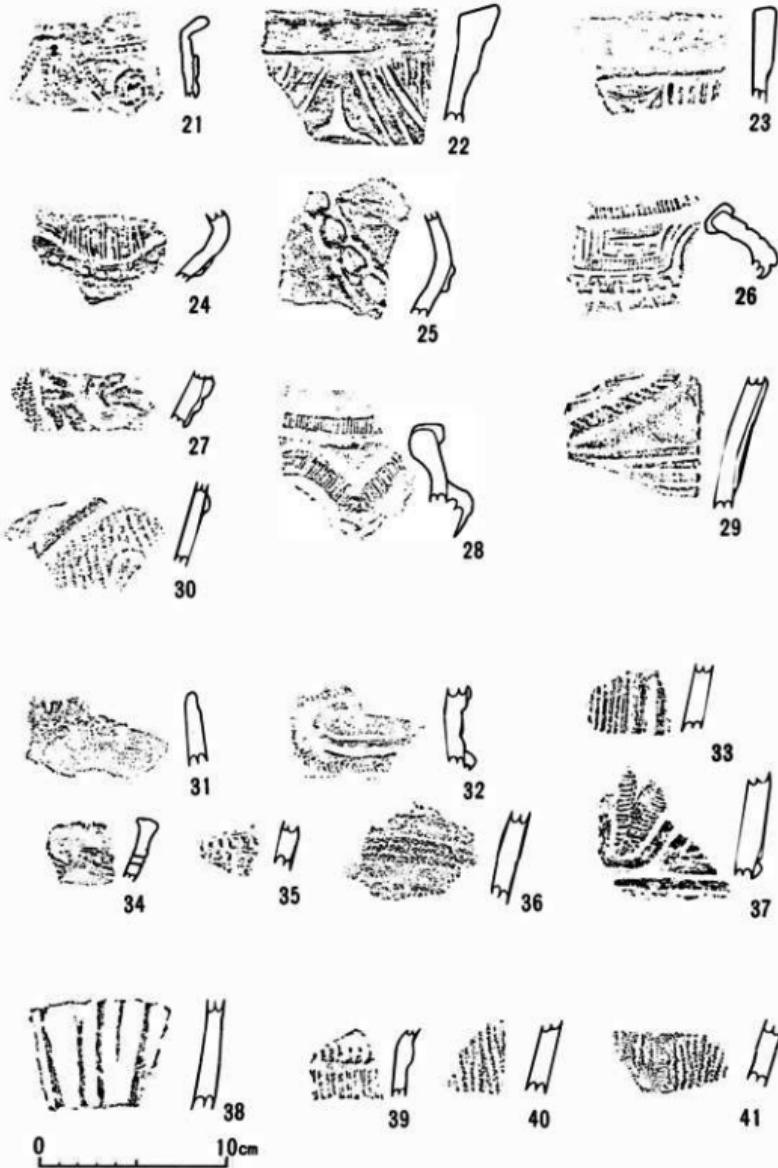
復元された土器は3点ある。いずれも深鉢型土器である。第8図1は山形把手が4カ所に付けられ、把手の下にはワラビ縄文が隆線で貼り付けられる。口縁部下の文様帶は縦条線が帯状に巡らされている。胴部下半には横に隆線が巡り、ワラビ文と逆丁字に接合する。このため、胴中央部には4つの方形区画があることになる。区画内はY字型のような沈線模様がある。2は口縁部に大きな把手が1カ所付けられ、胴部が細く胴部下半が再び張り出す屈曲底を呈する。胴部地文は縄文で、把手からh型懸垂文が垂下する。3はやはり口縁部に大きな把手が付けられる土器で、口縁部はキャリバー型をしており、胴部は細くしまり胴部下半は屈曲底を呈すると思われる。このほか把手や土器片が多量に出土しており、中期中葉の井戸尻式に属する。

#### (2) 中世土師質土器（第20図）

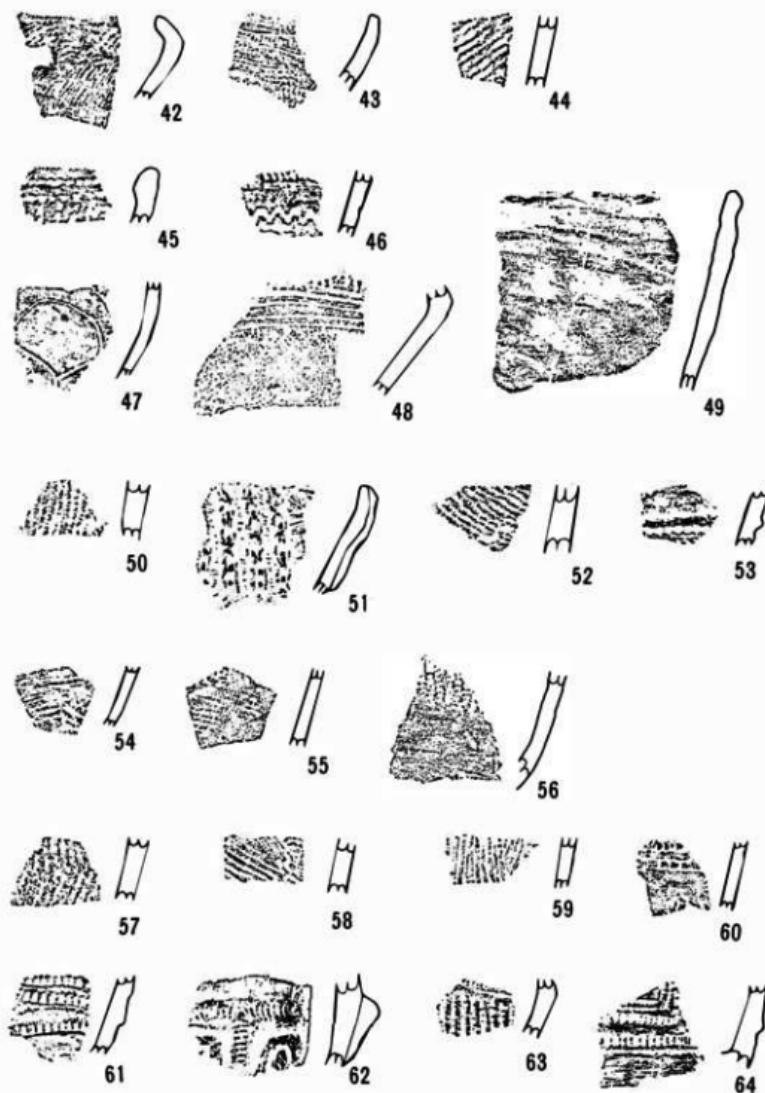
6号住居出土の1点のみである。口径12.5cm、底径7cm、器高5.5cmで、胎土は赤褐色で柔かい。整形は内外面ともにロクロ横なでされ、底部は回転糸切りである。



第13图 1号·2号·4号住居址出土土器

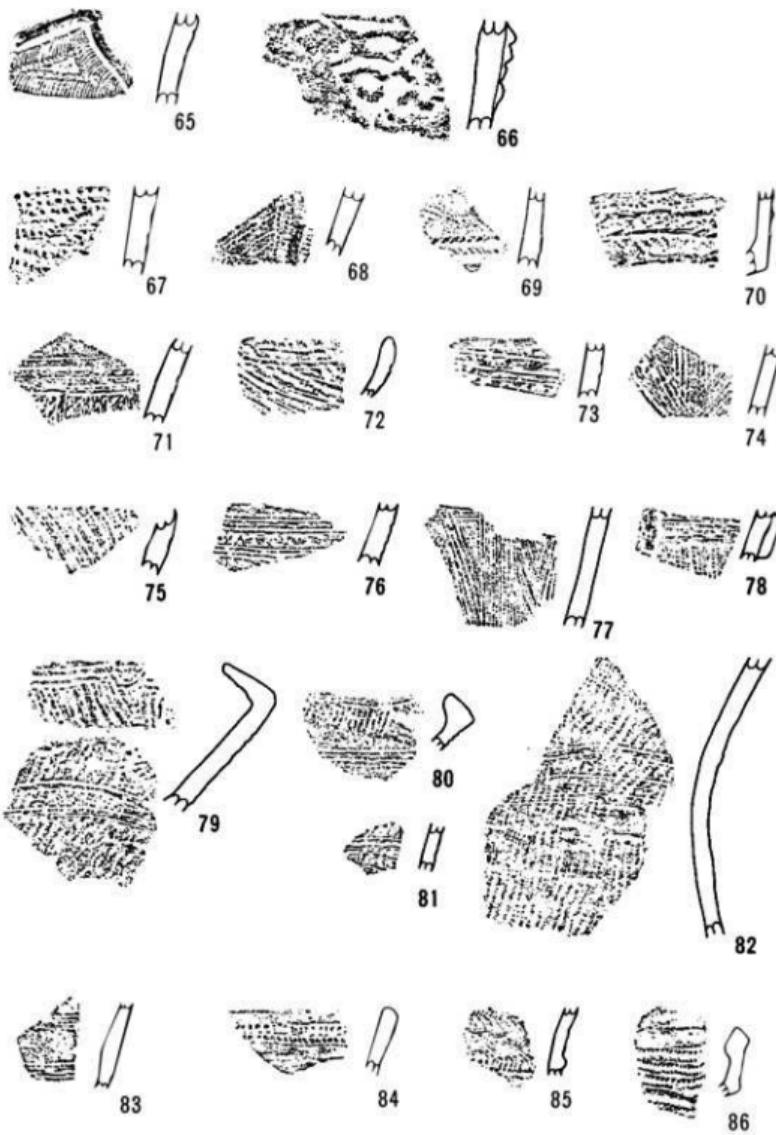


第14図 4号・6号住居址・溝出土土器

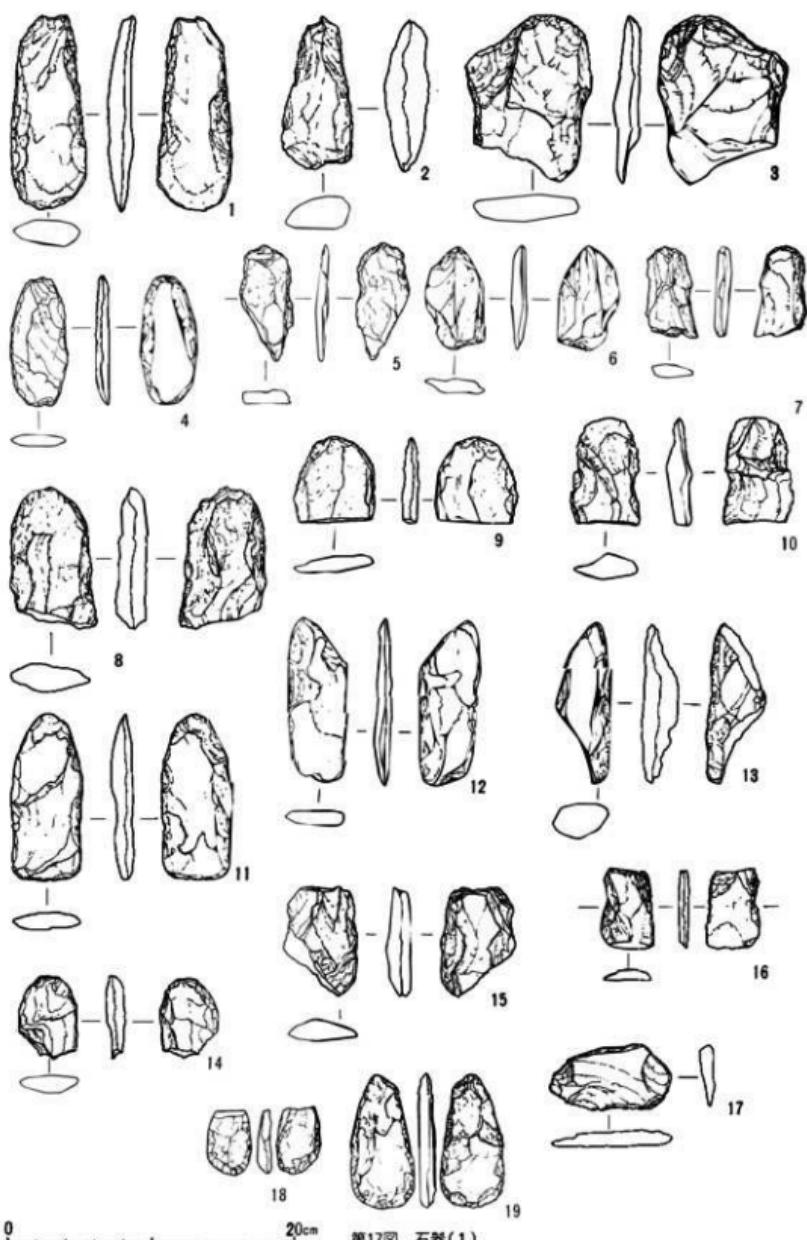


0 10cm

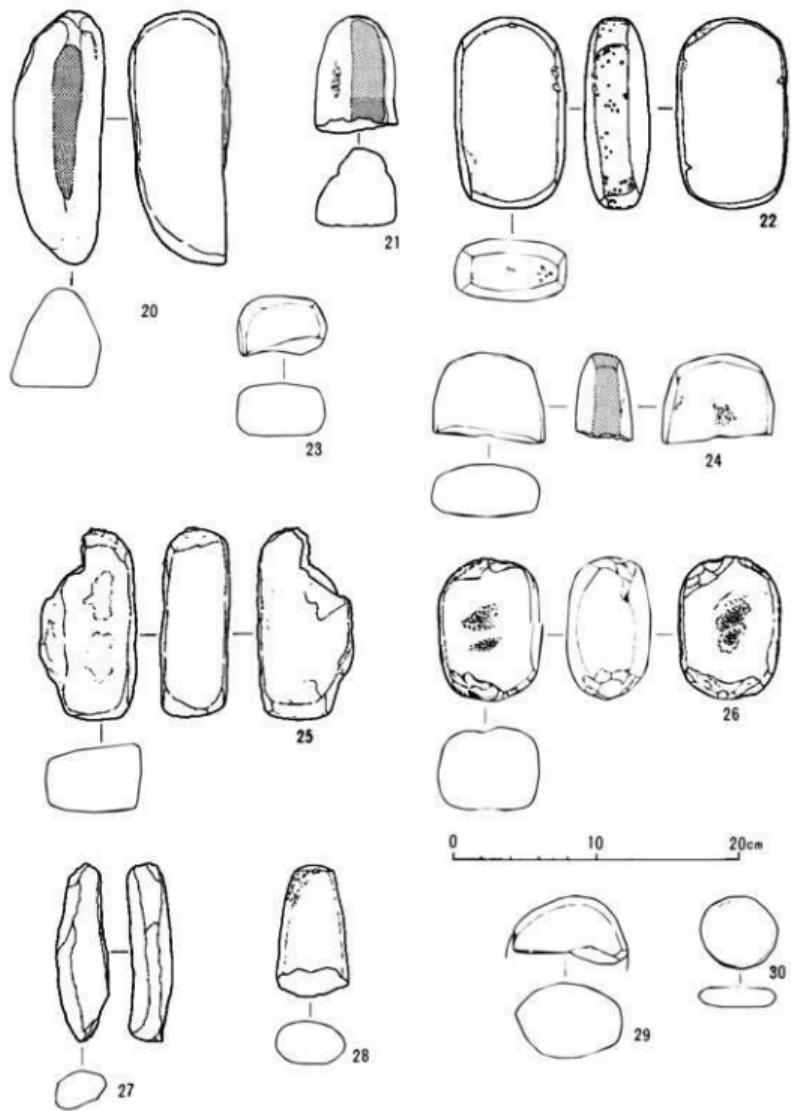
第15图 土壤·减压水槽地区出土遗物



第16図 減圧水槽地区・その他出土遺物



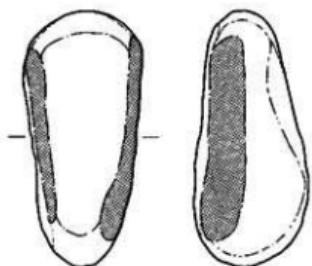
第17図 石器(1)



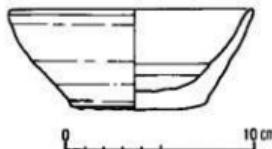
第18図 石器(2)

石器一覧表（第17～19図）

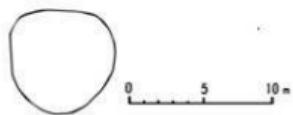
No	品名	石質	出土地点	No	品名	石質	出土地点
1	打製石斧	粘板岩	水槽J-46	16	打製石斧	粘板岩	G-42
2	打製石斧	ホルンヘルス	D-16	17	横刃型石器	粘板岩	C-39西
3	打製石斧	粘板岩	水槽J-44	18	打製石斧	粘板岩	4号住居
4	打製石斧	粘板岩	水槽B-	19	打製石斧	粘板岩	4号住居
5	打製石斧	粘板岩	5号住居	20	稜磨石	ホルンヘルス	J-46
6	打製石斧	粘板岩	H-45・J-45	21	稜磨石	花崗岩類	表土
7	打製石斧	粘板岩	H-44	22	磨石	安山岩	G-43 1号土壤
8	打製石斧	ホルンヘルス	表土	23	磨石	安山岩	H-43
9	打製石斧	粘板岩	C-34・35	24	凹石	安山岩	G-43・44 1号土壤
10	打製石斧	ホルンヘルス	J-45	25	磨石	花崗岩類	水槽J-46
11	打製石斧	粘板岩	C-39	26	凹石	安山岩	J-44・K-44
12	打製石斧	粘板岩	B-34	27	棒状石器	ホルンヘルス	表土
13	打製石斧	中粒砂岩	水槽D区	28	磨製石斧	粗粒砂岩	4号住居
14	打製石斧	砂質粘板岩	C-39	29	磨石	花崗岩類	C-43
15	打製石斧	粘板岩	J-46	30	稜磨石	安山岩	C-39



30



第20図 6号住居址出土土質土器



第19図 石器(3)

## 2. 石器（第17～19図）

出土石器は打製石斧、横刃型石器、磨製石斧、磨石などが出土している。磨石のスクリーントーンが貼ってある部分は、磨かれている部分である。

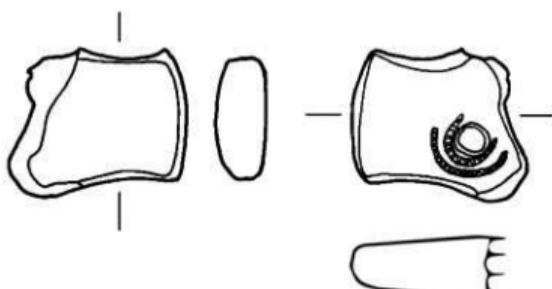
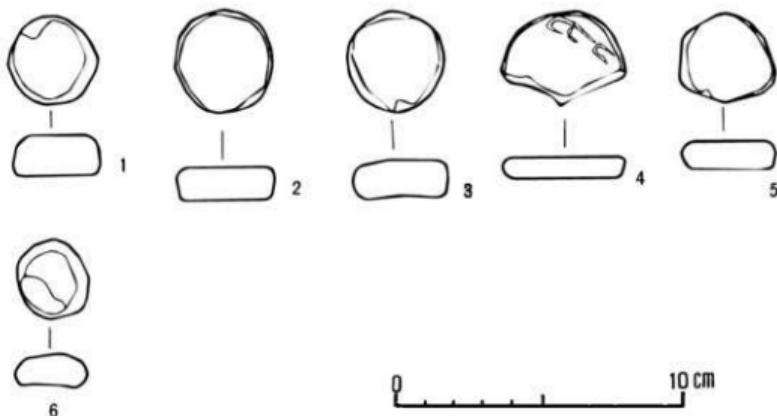
石錐・石匙・石錐や黒曜石などは出土しないが、極めて少量であった。

## 3. 特殊遺物（第21図）

土製円盤が6点4号住居から出土している。いずれも土器破片を利用したもので、直径3cm位のものが5点、4.5cmが1点である。このほかグリッドより1点出土している。

## 4. 土偶（第21図）

減圧水槽地区から1点発見された。手と脚部の一部で、乳の部分が表現される。



第21図 土製円盤・土偶

## 第Ⅳ章 まとめ

### 《縄文時代前期》

1983年度の、一の沢西遺跡発掘調査では、前期の住居址は1軒と土壙1基が発見され、他の土壙や表土中から諸磯b式の土器が出土していた。一の沢西遺跡調査の前期住居の3号住居は、遺跡の最西部に位置しており、今回発見の住居址とはおよそ100m程離れている。このため、周辺からいずれ前期後半の住居址が発見されるであろうという、調査以前からの期待があったが、今回の調査地区が極端に狭く、細長いという制約を受けていたし、前期の住居は概してまとまってあることが少ないという傾向があるので、2軒の住居の発見は大きな成果であった。

2軒の内、5号住居は遺物がほとんど出土していないが、2号住居は村道部分と合わせると良好な資料となった。出土土器は、今村啓爾氏による諸磯b式の新段階が中心となっており、一括資料として標式的なものとなるであろう。しかし、この時期に伴出する有孔浅鉢などはもっていない。

グリッド出土の土器には諸磯a式土器、諸磯c式土器が出土している。諸磯a式では竹管による円形刺突文・肋骨文・木葉文・波状文などが見られる。

諸磯b式の古期の土器は、減圧水槽地区や、グリッドから僅かに出土している。恐らくこの時期の遺構も、将来の発掘調査で検出されるであろう。

諸磯c式は条線地文で結節浮線文が口縁部から連続縦列に貼りつけられるもの、条線地文に、円形貼りつけ文があるもの、綾杉状条線のみのものもある。

### 《縄文時代中期》

五領台式土器の破片は僅かであるが、次の貉沢式土器はまとめて出土している。一括や復元可能にまでは土器破片が多くないが、まとまった資料である。

4号住居は井戸尻式土器が一括廃棄された住居で、長沢宏昌氏の分類では井戸尻Ⅲ新式に属するであろう。井戸尻式の古い段階では、胸部下半の屈曲底の張り出しが強いが、4号住居址出土遺物は屈曲底の張り出しが弱いので、井戸尻式でも新しい時期に属すると判断できる。しかし、曾利式土器に連続するには若干の時間がある。

住居址内部からは石器が少なく、打製石斧2、磨製石斧1、石匙1などがあるが、石鐵・磨石・凹石などは出土していない。なお、出土土器の内部の土を洗ったところ、クルミの炭化物らしきものが若干出土している。

### 《中世》

土師質土器壊が1点出土している。この時期の住居址は、長坂町小和田遺跡から29軒が発見されている。小和田遺跡の住居は各コーナーに接して柱穴が掘られ、住居中央にも柱穴が掘られるものと、中央に柱穴のないもの、柱穴のないものの3タイプがあると言う。報告者の岡本

氏は、これらの住居を15世紀前後に年代を置いているが、遺構内部から出土する遺物が少ないので、断定は出来ないと言う。

こうした形態の住居が中世でも比較的古い時代におかれるだろうと思われるが、本遺跡でも年代は明らかではない。

以上、本遺跡の発掘調査及び整理作業で気付いた点を列記した。

文末ではありますが、調査・整理に参加された方々、及び調査にご協力を戴いた関係各位に、御礼申し上げます。

#### 参考文献

- 1982 今村啓爾 「諸磯式土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣
- 1986 長沢宏昌 『一の沢西遺跡・村上遺跡・後呂遺跡・浜井場遺跡』山梨県教育委員会
- 1985 岡本範之 『小和田遺跡』長坂町教育委員会

# 天神下遺跡

所 在 地 山梨県東八代郡一宮町土塚字天神下458

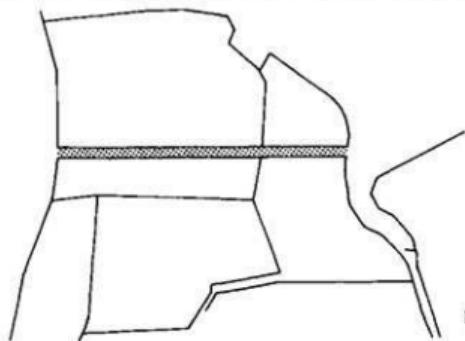
調査面積 100 m<sup>2</sup> (対象面積 600 m<sup>2</sup>)

調査期間 昭和61年11月18日

調査担当者 山梨県埋蔵文化財センター 末木 健

調査の方法 重機による表土除去後、作業員によって、トレンチ内部を清掃し、遺構・遺物の検出につとめた。

調査結果 出土遺物及び遺構は検出されなかった。



第22図 天神下遺跡

# 山口遺跡

所 在 地 山梨県東八代郡豊富村関原字山口 153

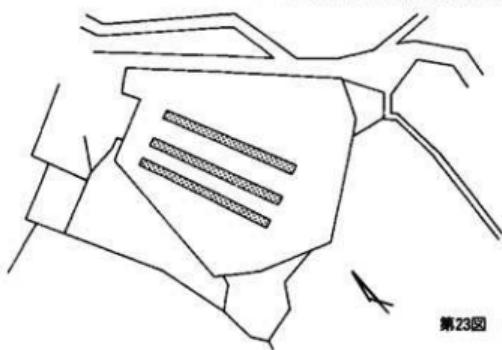
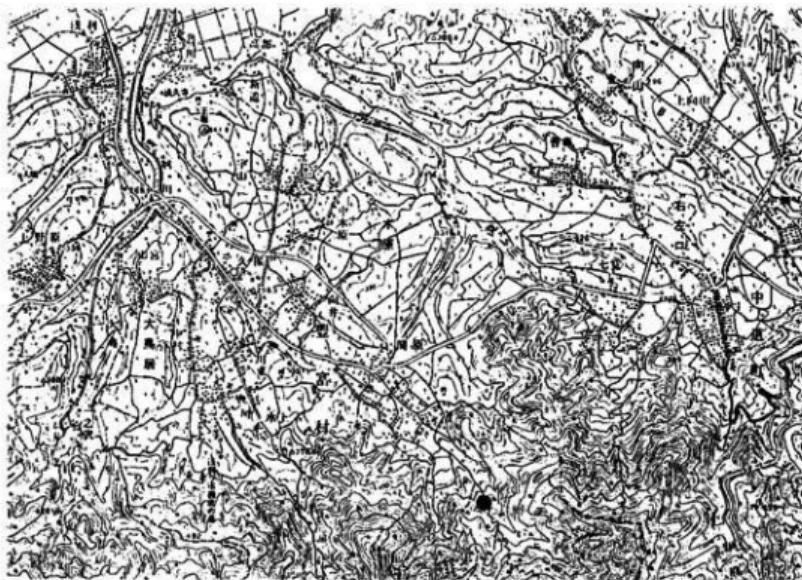
調査面積 60 m<sup>2</sup> (対象面積 437 m<sup>2</sup>)

調査期間 昭和61年 10月 14日

調査担当者 山梨県埋蔵文化財センター　末木　健

調査の方法 重機による表土除去後、作業員によって、トレンチ内部を清掃し、遺構・遺物の検出につとめた。

調査結果 出土遺物及び遺構は検出されなかった。



第23図 山口遺跡

図版1 一の沢北遺跡発掘調査状況

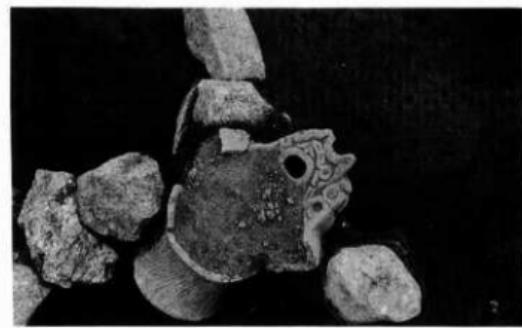


圖版 2  
1・2号住居址



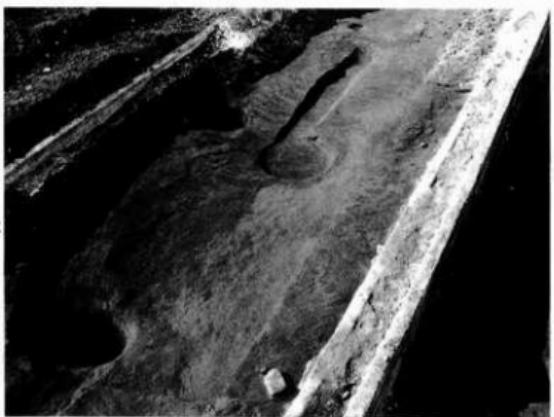


圖版4 4號住居址遺物出土狀態





5号住居址



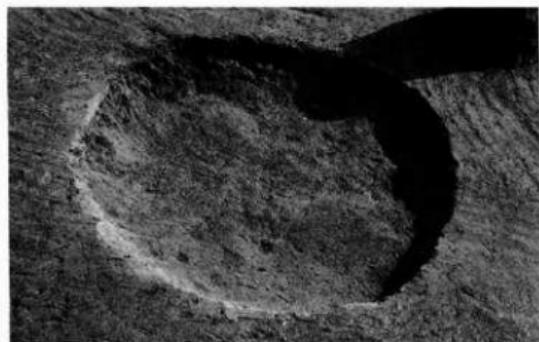
6号住居址



减压水槽地区



減壓水槽地区



3号土壤



1号土壤



D 6 グリッド土壤断面

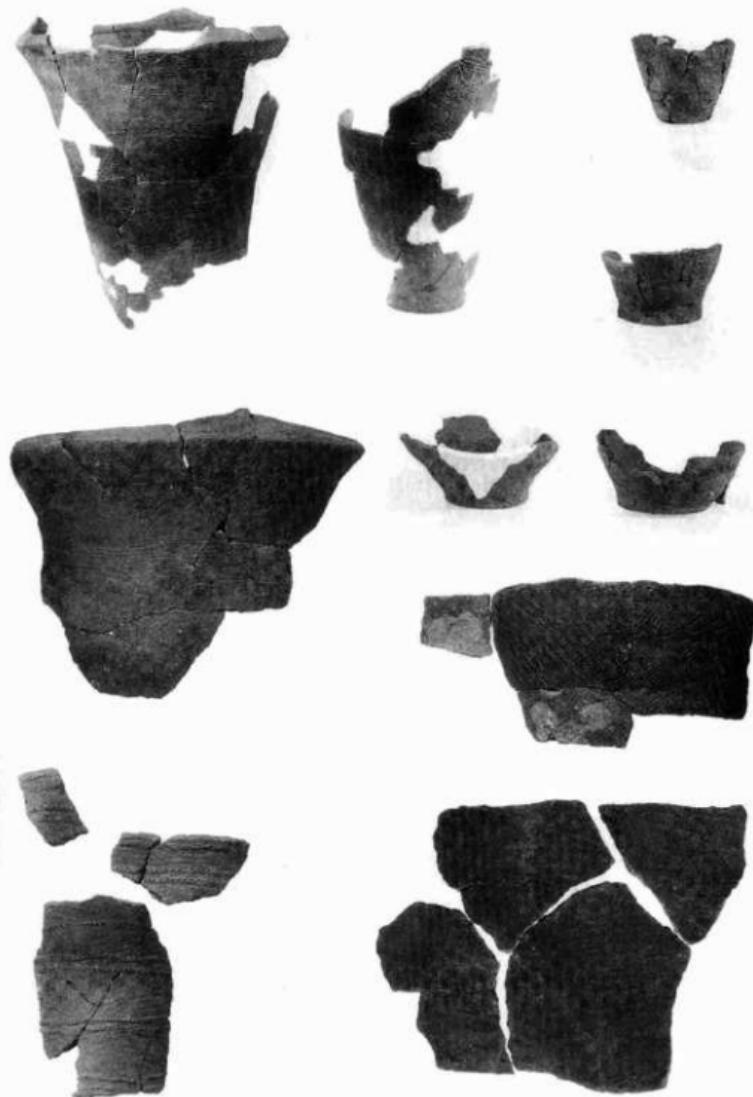


6号住居址南側溝

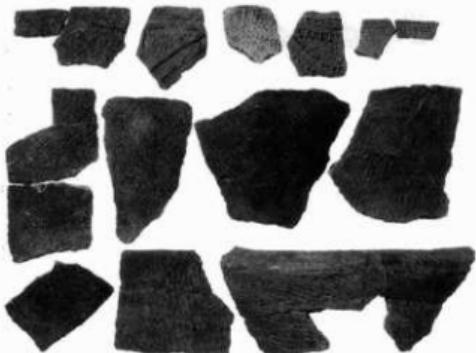
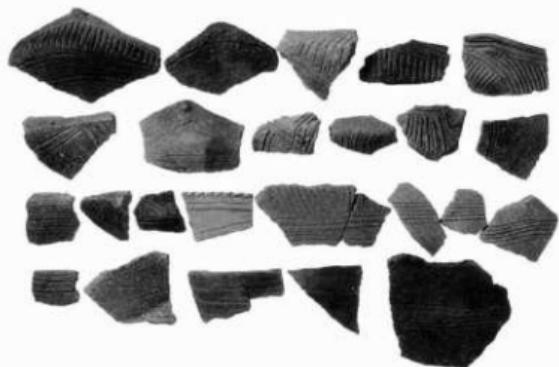


減圧水槽地区溝

圖版 8  
2號住居址出土遺物(1)



圖版 9  
2號住居址出土遺物(2)

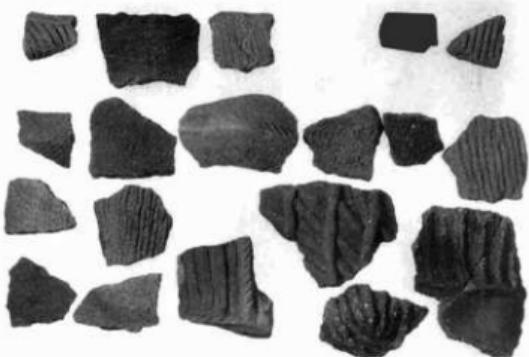
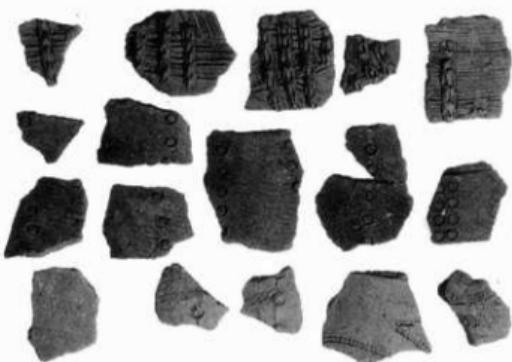


圖版 10  
4·6號住居址出土遺物

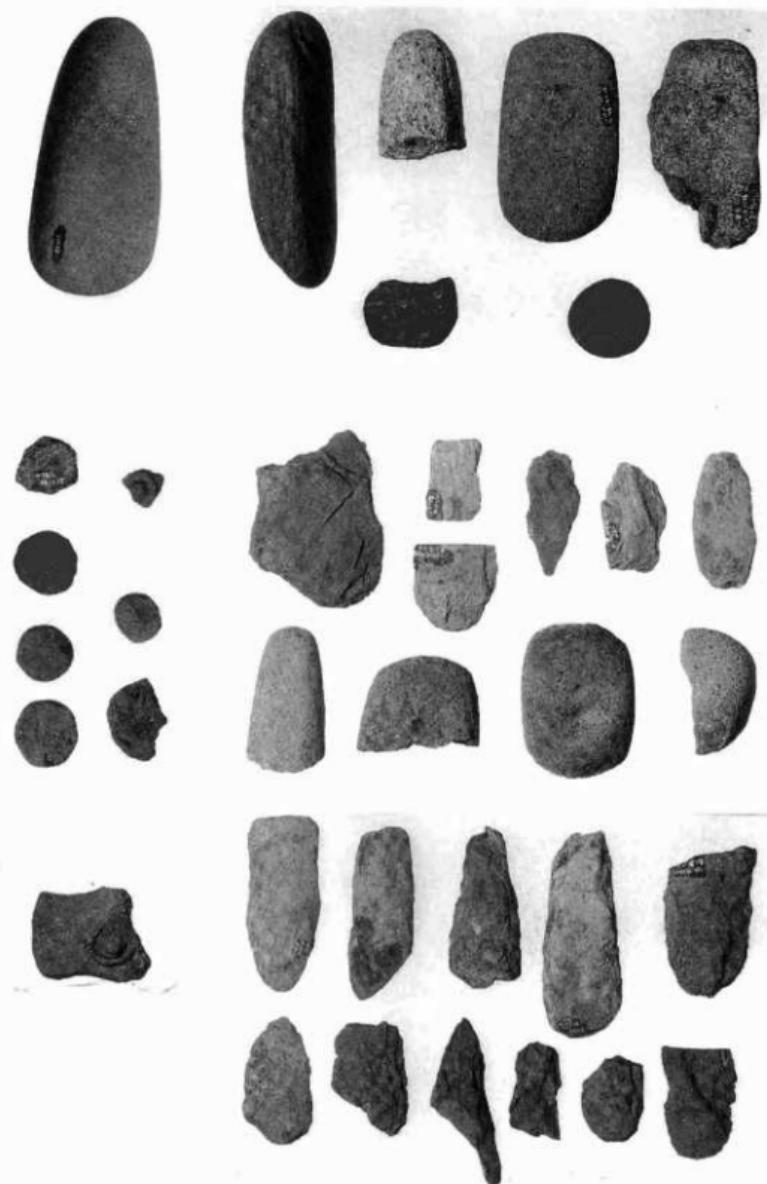


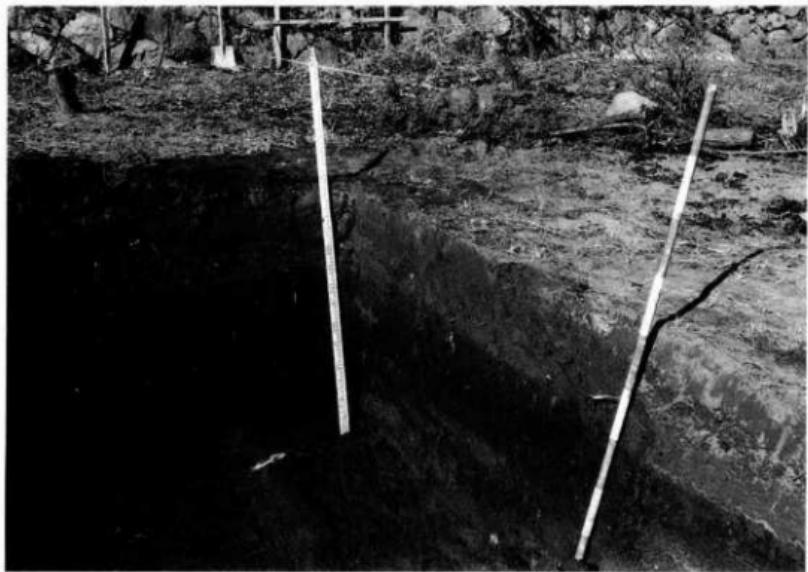
6號住居址出土土師質土器

図版 11 各遺構・グリフド出土土器



圖版12 各遺構出土石器·土製凹盤·土偶







山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第33集  
一の沢北遺跡他発掘調査報告書

笛吹川農業水利事業に  
伴う発掘調査報告書

発行日 昭和63年3月31日

発行所 山梨県教育委員会

山梨県埋蔵文化財センター

印刷所 溫故堂株式会社

